

人の禪で相撲を取るのも悪くない？！

池田亜希子



ミトコンドリア病の子供たちに有効な薬を

ミトコンドリア病という難病をご存知でしょうか。ミトコンドリアとは私たちの体の細胞にある細胞小器官の一つで、エネルギーを生産するという重要な役割を果たしています。このミトコンドリアに異常が起こると、臓器障害や進行性の筋力低下、知的退行、けいれん、発達停止などの症状が現れます。大人が発病することもあります。特に成長に多くのエネルギーを必要とする小さな子供に重い症状がみられます。

いまだに有効な薬がないため、世界的に医薬品開発が進められています。5-アミノリブリン酸塩酸塩(5-ALA HCl)は発酵による大量生産が日本で可能になった成分で、現在、クエン酸第一鉄ナトリウム(SFC)とともに投与した際のミトコンドリア病への有効性と安全性が、54名の患者さんを対象にした「第3相臨床試験(フェーズIII)」で調べられています。

医薬品開発は、治験薬を少人数の健康成人に投与して安全性を確かめる「第1相臨床試験(フェーズI)」から始まり、治験薬が効果を示すと予想される、比較的少人数の患者さんで有効性、安全性、使い方を調べる「第2相臨床試験(フェーズII)」、さらにたくさんの患者さんを対象にした「第3相臨床試験」へと段階を追って進められます。

5-ALA HClのミトコンドリア病を対象とした臨床試験では、第3相に入る際にちょっとした問題が生じました。2015年5月に始まった第2相臨床試験は、治験薬を216週(4年以上)にわたって投与するもので、2歳半未満の子供10名が参加しました¹⁾。ここでの臨床試験成績がよかったため、現在、第3相臨床試験²⁾が行われているわけです。実際に、治験薬を飲んだ子供たちの親は、「薬を飲み始めてから急激に成長するのを目の当たりにした」と口々に証言しています。また、試験責任医師である埼玉医科大学病院小児科の大竹明先生も「風邪をひか

なくなり、入院回数が減るなど、明らかに子供たちの症状が良くなっているのを感じる」と話します。

問題となったのは、第3相臨床試験のプロトコールでした。まず、臨床試験参加者全員が24週間、治験薬を飲みます。その後、効いたと思われる参加者だけを、引き続き治験薬を飲むグループと偽薬を飲むグループの2群に分けて、さらに48週間試験を続けます。二重盲検試験なので、どちらの薬を飲んでいるかは、参加者にも医師にもわかりません。「もし偽薬を飲むグループに入り、病状が悪くなったらどうするのか……」。もちろん、症状が悪化し試験が続けられないと判断されれば、試験から脱落し薬を飲むことになりません。それでも「二重盲検期間で薬を一年近く飲まないとして、5歳の子供の成長にとって、それはたいへんな時間なのです」という母親の言葉に象徴されるように、みな不安な気持ちを抱えていました。

どんなに開発が急がれる薬であっても、患者さんの安全を守り、本当に効く薬を世の中に出すためには、開発の順序を守られなくてはならないことはわかっています。しかし、このケースでは、臨床試験に参加する患者さんが不安にならない方法はなかったのだろうかと考えさせられます。結果的には、多くの方が「これからの子供たちのために」と臨床試験に理解を示してくださり、第3相臨床試験は続けられました。

バイオだからラジオに採用

このように始めさせていただいたのは、私がライターだからです。ライターとは、「伝えたい情報」があってこそ生きる存在。私は基本的に黒子です。

こんな私が、どうして日本生物工学会の「バイオ系のキャリアデザイン」のコーナーで自分のことを書かせていただくことになったのか。それは大学でバイオテクノロジーを専攻し、遺伝子やタンパク質の研究をしていたからだと理解しています。

大学では、菌名を言ったらこの研究室かわかるほど個性的な極限微生物の研究をしていました。この“変わり者”を扱う研究は面白くて好きでしたが、実験はあまり上手ではありませんでした。修士課程修了後は製薬会社に入り、売り出された薬の副作用などの有害事象を追いかける「市販後調査」の職に就きました。それは冒頭のミトコンドリア病の臨床試験にも通じる、“薬を使う患者さんの安全を守る”ためのやりがいのある仕事でした。ここまではバイオ系のキャリアを積んでいくつもりでした。今考えると、それもあったのだらうと思います。そうしたら今頃は、外資系の製薬会社でバリバリ働いていたかもしれません。

ところが入社してしばらくすると「一生この仕事を続けるのか」と考えるようになり、幼いころから興味があった情報を発信する仕事に就くにはこれが最後のチャンスだと、テレビやラジオの採用面接を受けるようになりました。そして、なかなか中途採用が難しい世界で、たった一社、TBSラジオの子会社に採用が決まったのです。

当時、しゃべりもできない、取材もできない私がどうして採用されたのかを考えてみると、皮肉にも「大学でバイオを学んできたから」だったと思われそうです。面白いものや変わったものを探しているラジオの世界で、バイオ系人材はめったに現れない“超レアキャラ”だったのです。それは、採用が決まったほかの人たちのおしゃべりだったり、物知りだったり、運動神経が抜群によかったりする個性に匹敵したのです。

そしてインフルエンザが流行したらウイルスのことを聞かれ、科学系のラジオ番組をやる時にはスタジオに来ないかと声をかけられ、これまで以上に“自分は理系なのだ”と意識させられました。

目立ちたがり屋が黒子も悪くないと思うように

ラジオですから、“しゃべりたい”という気持ちで入りましたが、実際には地味な作業もたくさんやりました。放送クルーの中で“しゃべり手”という役割になれば、取材としゃべりに専念しますが、それ以外の多くのスタッフは車を運転して中継現場へ行き、放送機材の準備をし、しゃべり手が気持ちよく放送できるように気を配ります。これらの作業はすべて、放送を成功させるためのものです。

特に印象に残っているのは、秋の秩父を走るSLからの生中継。SLからコンビニに電波を飛ばし、そこから電話線で本社に通して放送しました。SLからコンビニに電波が届く時間が限られていたため、スタジオから呼



ジャビットとTBSラジオの番宣チラシ配り

びかけられる時間も、中継終わりの時間も正確に決まっていた。しゃべり手と2人でSLに乗り込み、私は放送の間に合うように機材の準備をしました。コンビニには、放送技術専門のスタッフが、私たちが乗るSLが通過するのを待っています。こうして“走るSLからの生中継”という貴重な体験をしました。ほかにもお正月には、混雑する銀座に繰り出し必死に福袋を手に入れ、リスナーへプレゼントしました。ラジオをつくる人たちは、とにかく“全力で遊ぶ”のです。それは簡単にできることではありません。何もできない私はいろいろ苦労しましたが、これまでいた世界とはまったく違った価値観に触れたことは、大きな財産になっていると思います。

私は専門スタッフには及ばないものの、そこそこ放送技術を習得し、現場でも重宝がられる存在になっていたと自負しています。こうしてラジオ放送に関わっていく中で、徐々に取材やしゃべりもできるようになり、やりたい仕事をやらせてもらえるようになりました。仕事の幅が広がると、やりたいことと、できることが違うことがわかると同時に、やりたいことが少しずつ変わり始めました。「黒子も悪くない」と思うようになったのです。

30代に入ると、社内ではそろそろ“しゃべり手”から完全に“制作スタッフ”に転向しないかという雰囲気が出てきます。それも悪くはありませんでしたが、私はちょっと違うこともしてみたかったので、転職を決めました。この時、上司から「ラジオは、人の禪で相撲を取るようなもの。君は何か語れる物をもちなさい」と言われたのを覚えています。

経験のすべてが生きるライター職

あれから13年、科学系のライターをやっています。気付けば、ラジオに入る時に“さよなら”を告げたはず

の理系の世界に、すっかり舞い戻っています。発信したいけれど、“それはいったい何なのか”という本質的な問題に直面したとき、やはり自分は大学で学んだバイオや就職で選んだ医薬に興味があるのだと気付かされたからです。そしてバイオを学んで科学の基礎知識があるお陰で、科学系ライターとしてさまざまな分野の文章を書き続けることができています。

一方で、ラジオ時代のことは何も役に立っていないのかという、そんなことはまったくありません。現状、十分な能力に達しているかはわかりませんが、取材力は、上司の取材に同行したり、時には“下手くそ”と怒られたりしながらラジオで培ったものです。こう考えると、今までやってきたことのすべてが今の仕事に生きています。ただ、「相変わらず、人の禪で相撲を取っています！」と上司に伝えなくてはなりません。でもそれは、13年前とは違って、とても前向きな気持ちで伝えることができそうです。

医療の世界で発信ができるようになりたい

ライターはジャーナリストとは違うので、「取材内容を正しく伝えることは求められるけれど、その中で自分の意見を表明する必要はない」というようなことを言われることがあります。確かに、それは一理あります。しかし、伝えたい気持ちがなくてはライターもなかなか良いものは書けないのではないのでしょうか。私の情報発信は、ラジオでの“週末の楽しいお出かけ情報”から始まりました。これはとても素敵な情報発信でした。ライターになってからは“科学”に関係するいろいろな情報を発信してきました。そして今、冒頭のミトコンドリア病の臨床試験の問題のように、医療の問題なども発信できたらと思いついています。人間は、何にも増して健康でありたいと願うもの。医療は、私が接する情報の中でも、特に重要なものの一つなのです。ただ、重要なだけに発信するのはとても難しいとわかっているつもりです。

人生の岐路に立たされた時に、私が選んできたものが



これまでに執筆・制作に関わった書籍

正しかったかどうかはわかりません。ただ、今も、世の中に伝えたいことがあるということは、ライターという職業は私に向いていたのだと思います。また最近、機関誌などへの短い文章ばかりでなく、本も書かせてもらえるようになりました。ライター歴10年を過ぎたころから、書きたい気持ちに、書く力がようやく追いついてきたように感じます。

最後に、大学から製薬会社、ラジオ、ライターと進んでこられたのは、私をそれぞれの世界につないでくれた人たちがいたからだと書いておかななくてはなりません。無意識だと思いますが、ラジオ時代に科学イベントの司会業を紹介してくださるなど、私が科学の世界から切り離されないようにしてくださった某先生、ラジオ番組の打ち合わせの際に今勤めるライター事務所に連れて来てくださった某ディレクター、まったくの素人に化学記事を書くというチャンスをくださった某先輩…それぞれの世界に私を招待してくれた人たちに感謝しています。

文 献

- 1) 公益社団法人 日本医師会 治験促進センター 臨床試験登録システム：https://dbcentre3.jmacct.med.or.jp/JMACTR/App/JMACTRE02_04/JMACTRE02_04.aspx?kbn=3&seqno=5124 (2019/9/30).
- 2) 公益社団法人 日本医師会 治験促進センター 臨床試験登録システム：https://dbcentre3.jmacct.med.or.jp/JMACTR/App/JMACTRE02_04/JMACTRE02_04.aspx?kbn=3&seqno=8077 (2019/9/30).

<略歴> 1997年 東京工業大学生命理工学部生物工学科卒業。1999年 同大学院生命理工学研究科修士課程バイオテクノロジー専攻修了。三菱化学(現・田辺三菱製薬)の医薬品安全部門、TBSラジオのレポーターを経て、現在サイテック・コミュニケーションズにてサイエンスライターとして活動。

<趣味> ナレーション、観劇